

## 報 告 (二)

「現代日本の都市と農村」分析のための前提  
(研究会用レジュメ)

島 崎 稔

1. 「都市と農村」規定  
都市・農村それぞれの規定

農村——「村落」的なものを根底に

都市——農村との関連に都市を規定するひとつの条件

歴史的規定——「都市」・「都市と農村との関係」

ウェーバーの「市場と要塞の統一体としての都市」

古代都市・中世都市と近代都市との類型的相違

近代都市——典型としての近代工業都市

その生成発展の過程における農村との関連

A・スマス——「相互的かつ互惠的」関係

M・マルクス

社会的分業の結果としての都市と農村との分離・そし

て両者の利害の対立

「社会の全経済史は都市と農村との対立の運動に要約される」

「ドイツ・イデオロギー」における規定

既にそのうちに発展の不均等性を内包する「資本と土地所理論的規定

有」としての規定

「ドイツ・イデオロギー」等においては、資本主義社会における固有名ものとしてはなお十分に展開されてはない。資本主義社会は、いうまでもなく、私的所有がもつとも純粹なかたちをとり、自己の所有するものを自由に処分しえて、それが労働力にまでおよぶものであった。そこではじめて、資本は近代的な産業資本として、本来的に封建的な土地所有から分離・独立する。土地所有はそこでは資本に従属しながら資本にとって矛盾として制限的な作用をなす。

このようない論理が確定されて全面的に展開するのは  
いうまでもなく「資本論」の世界

「資本論」はそのものとして「商品」の分析から始まり、「資本主義社会の富は「一の大なる商品集成」としてえがかれ、「商品」を媒介とする社会関係が分析される。  
商品所有者間の「相互的他者たる関係は、自然発生的  
共同体の諸成員にとっては実存しない。商品交換は、  
諸共同体の終るところで始まる」。

資本主義社会において、「商品」を媒介とする人と人との  
関係、即ち「市場関係」は人間の社会生活のすみずみをおい、全社会的規模に拡大しながら集中する。  
ことに「都市」→「商品」……抽象化  
あつとも基本的な範疇にまでおりたうえで、「都市」

を「市場関係の凝集点」として規定したい。このよう

な意味において、資本主義社会はまこと、都市的社會であり、「都市」として具象する。

これに對して、「土地所有」は前社會の母班をなす。資本制に先行する歴史的諸段階においてその「土地所有」に規定されながら直接生産者は「共同体」關係をとりむすぶが、その残滓は移行期を通じてみられ、資本主義的關係が全社會的規模と深さにおいて成立しえていない限りにおいて、その土地所有關係に規定された「共同体的」關係は残らざるをえない。

#### レーニン……「市場の表式」

①「市場の概念は、社會的分業の概念とまったく不可分のもの」であり、「社會的分業の完成」した姿に示されるあらゆる産業部門にわたった小生産者の分解||資本・資労働關係への転化は、「市場関係」の貫徹を意味すること。

②その過程において、異った産業部門間、特に農業と他産業（工業）部門とのあいだに資本主義的發展の不均等が存在すること。

農業における小生産と工業における資本制生産との併存という構造的不均衡が過程のうちに

市場理論の「表式」の重點は明らかに「商品經濟から資本主義經濟への移行」にある。「表式」に示したところをレーニンは「ロシアにおける資本主義の發達において実証分析してみせたわけであるが、十九世紀末のロシアが示すも

のは、まさに「表式」の第五期

生産者の兩極分解は第四期から始まるが、第五期ではブロレタリア化しつつある人々の手には、もはや生計維持のために必要な量の半分の農業經營しか残されていない。

「独立の農業經營のみすばらしい名残」……貧農半プロ層

「表式」第四期以降の展開、第五期から第六期への展望

③レーニンが明らかにしたことは、農民層分解が工業のための国内市場を形成すること、そしてそのことが「既に大工業を尖頭にもつ都市の資本主義と、なお資本の完全な支配以前にある農村との不均等發展」という現実を認めたうえで、両者を結ぶ現実分析の基礎環をなすもの

資本主義的發展をとげたうえでも……「構成高度化表式」

「生産手段のための生産手段の生産がもともと急速に増大し、それにつづいて消費資料のための生産手段が増大するが、消費資料の生産はもつとも緩慢に増大する。」

農業においても、小生産者の分解は「新しい型の農村住民」をつくり出し、それは「商品的、貨幣的な性格」を特徴とする。

「隸屬農民の土地所有者に対する伝統的、慣習的な關係は、ここでは、契約にもとづく純粹な貨幣的關係に転化する」と、

然しこの過程は一般に緩慢である。工業においてかかる農業からの完全な分離は機械制大工業をまつてはじめておこな

わられるもので、それ以前の段階においてはなお「土地」との結びつきのなかで「前資本主義的関係の遺物」が指摘される。

レーニンは「工場によって巨大な規模で行なわれる労働の社会化と工場で働く住民の感情および觀念の改造」の過程を「発達」のなかで詳しく述べていている。

経済的発展の飛躍的性格、生産方法の急速な改变、生産の巨大な集積、人格的隸属のあらゆる形態と家父長制的関係との消滅、住民の移動性、大きな産業中心地の影響、そこに生ずる階級的な群への分裂とその結社、住民の意識等々。

かくて、農村から都市への移行を、その基底条件、階級編成、社会関係、支配の形態として一括するならば、農村の土地所有—小生産者—「共同体」関係—人格的支配から、都市の資本—資本家・賃労働者—市場関係—非人格的支配への移行としてみることができる。

#### 都市と農村」展開

「市場関係と共同体との関連」として把握された「都市と農村との関係」が、資本主義の発展、独占段階に入つていかなる形態となるか、要は、不均等発展のうちにとり残されてきた農民層がこの段階においていかなる分解を示すかにある。その点をレーニンは、独占と競争局面との関係として明らかにしていく。

資本主義の発展過程において、「競争は独占に転化」するしかし、同時に、独占は「自由競争から発生しながらも、自由競争を排除せず、自由競争のうえに、これとならんで存在し、このことによって幾多のとくに鋭い矛盾、軋轢、紛争を生みだす」

(「帝国主義論」)。

このようないくつかの工業部門における特殊な状況を指摘しながら、「幾つかの工業部門で形成されつつある独占は、總体として資本主義的生産に固有の混沌状態をつづめ激化させていく。資本主義一般にとって特徴的な、農業と工業との発展の不均衡はますます大きくなる」。

と述べている。「自由競争の直接の対立物」として独占が現われながら、独占の支配下になお競争局面の存在は当然それを通じて、歪曲されながら分解は促進されるとみななければならぬ。(独占支配下における農・工間の発展の不均衡は、一般に、独占以前からもちこされた「構造的不均衡」、不等価交換、土地所有の制約、によって拡大する)。かくして、農工間の関係は、「構造的不均衡」の面を稀薄化させながら、漸次「格差」の拡大として深化していくようと思われる。このよう理解のもとに、かつて、通信四号において、農村都市化の理論的要点を、「「都市」(市場関係の凝聚点)からの資本主義的市場関係の直接間接の影響下にあって農村の小生産者層の分解がいかなる方向と形態において触発されるか」の問題であるとした。

#### 2 戦後日本の「都市と農村」

「都市と農村との関連」を一般的抽象的には以上のように考えたが、日本の現状分析、戦後日本資本主義の構造分析の一貫として、この一般的規定をもつていかに具体的に分析を果しうるか。

戦後日本資本主義の再編過程

敗戦直後・鉱工業生産の潰滅的状態

旧秩序の解体・一連の民主化措置と「再版」原蓄過程の進行

〔農地改革・農民的小土地所有

・低賃金・低米価+強権供出の強行

第一階梯（昭二五～三〇年）

直接的生活条件に密着する食糧生産部門と一般に第Ⅱ部門ならびにこれと直接的な関連をもつ生産部門が主導

農業生産力の急上昇

第二階梯（昭三〇～）

ここでの主導は第Ⅰ部門であって、第Ⅰ部門プロパーのための第Ⅰ部門の内部循環にまで

工業生産力の比類のない展開・農業生産力の停滞・衰退

六〇年代～七〇年代

第Ⅱ階梯の延長線上にあって矛盾の顕在化してくる段階

（昭三七・四〇・四六年不況）

昭三〇～三五年・過渡期・昭三五～四〇年高度成長

長前半期・昭四〇年～高度成長後半期・高度成長

期前半・後半の階級構成の相違（表提示）

在来産業の地盤沈下・中小零細企業の激しい浮沈・農工間「格差」の拡大→「格差」+解体の理法の追求  
○この過程に戦後農村社会を支えてきた一・〇～

一・五町層のまさに層としての解体

○六七年までの米価上昇、八年を転換点として、

総合農政下に米価据置き、減反政策

○七一年「農家経済調査」よれば、全階層が農業

所得で家族家計費を賄えず、五反以下層では農外所得のみで家族家計費を充足しうる。下層ほど一

人当たり家計費水準が上昇する頗倒的関係

第Ⅱ階梯において「日本農業は突如として一個の厖大なる資本プロパーに対する労働力の供給基盤に転化されてしまった」

（山田盛太郎）

「農村工業導入促進法」もみて現在、農村への工場進出が、農工一体、「農業と工業との均衡ある発展」の名のもとに農業従事者の「安定的な所得の確保」をうたって、農家労働力の根こそぎ動員をはかっている。

なお一寸別に付言するならば、日本の都市類型を考えていこうとする場合、日本資本主義の再生産構造の基礎上にはかりていく必要があるよう思う。

都市類型と農業形態

繊維工業都市 → 重化学工業都市

管理中核型の都市の国独資のもとの位置  
それぞれの農業・農村の構造的関連の相違

これまでおこなってきた共同調査事例からの問題点の提示

①燕市調査（昭三六～七）においては、「地方中小企業の再生産構造と農民層分解」（『土地制度史学』第三三号・島崎美代子）なる問題設定のもとに、戦後日本の農民層分解が、△農業内部の原理と資本プロパーの原理の加重▽と△の要因によって規定される、即ち、△農業内部の必然として成立する蓄積と階層分化△分解の内的メカニズム▽と△資本プロパーの蓄積に基

づく支配力からする「農業内部の蓄積と分解のメカニズム」への作用力、以上二つの再生産と循環の複合過程で問題が定まるとしているが、この複合過程は現実的には、農地改革後の零細農耕制のもとでの農業經營と、資本主義の一般的危機における巨大な独占体を主軸とする国家独占資本主義体制のもとでの企業体との

全国統一市場を通しての接触作用によるものであると同時に地域的構成をなす農業に対する地方資本の直接的なII地域的市場関係を通しての接触作用の過程としてあらわれる。(同論文による)。

高位生産力地帯としての西蒲原農村、代表的な中小企業金属工業都市、の織りなす地域的構成のなかで課題追求これは、戦後日本資本主義の再生産構造を、労働市場と農民層分解との関連を中心視点として、一定の地域的構成のなかで把握するための一準備作業としておこなわれ、以下の調査も同じ問題意識のもとでおこなわれてきた。

#### (2) 調査・松本新産業都市調査(昭四一～四三)

各分野との共同調査のため、工業、労働市場の固有の分析は他にまかされた。農業の分析、その結論部分としての農村階級編成の変化についてのみ示す。この段階における工業都市周辺の農民層分解の様相を端的に示していくものと思われる。

#### (3) 鹿島調査(昭四六～四八年)

鹿島開発の位置……旧全総→新全総

「農工両全」の名のもとで、農民の土地・水の大規模な奪い、最新鋭重化学工業のコンビナートと膨大な下請企業、低位生産力の零細な農家群。そこでの労働力編成II序列と農民層分解との構造的関聯。

潰滅する農業・農村部落と一部に存在する施設園芸による中農層の存立。(現在調査進行中)

#### 3. 農業「農村社会」解体の意味

「都市と農村」の経済学的分析——「それはおそらく資本主義のある一面を明らかにし、同時にこの関係の発展が資本主義の危機を醸成するひとつの条件であることを理解せしめるよすがとなるであ

	60年	65年
「農村企業者」	2.8%	4.9%
中農	2.1	1.3
うち富裕農	0.3	0.7
貧農	47.5	29.5
上層	16.0	2.6
中層	16.6	11.7
下層	14.9	15.2
「小営業者」	1.31	1.11
「農村労働者」	34.5	58.2

「農村企業者」、「小営業者」、「農村労働者」はいずれも兼業農家である。

うう」（大内力）。

「全般的都市化・現象がいわれるなかでの農業・「農村社会」」

解体

農業危機

戦前

地主的土地位所有と小生産との矛盾を資本主義的に解決しえず、

地主制の危機が同時に日本資本主義の危機を意味した。

一般的危機の前提条件として「型」の分解が問題となり、それが「農村解体」又は「農村破滅」としてとらえられた。

養蚕・織物・製糸業の破綻による「型」の分解

→半封建的小作料と低賃金との相互規定関係の解体

→資本の巨大な隸役機構の解体

一般的危機はこの「解体」を基礎に進行

戦後

1. 戦争直後の食料危機・強権供出。税金・シェーレ・ドッジラインのもとでの全層的な農家経済の破綻—耕作放棄

2. 現時点

農民的小土地所有が創設されたが、高度独占の支配するもとで、その展開を閉ざされ、生産力の発展をみながら、それが農家経済の広汎な解体を現象する。

農民層分解の局面として、歪曲されながら極く一部に上向化はあるにしても、それによる資本主義的再編をはるかに凌ぐ農民層の没落

農民的小土地所有（＝零細農耕制）の行きづまりが、いかなる意味で農業危機たりうるのか。

追補

再編の展望をめぐって

独占の側—インテグレーション・システム農業の評価

「全般的都市化・のもとでの農村の荒廃

「都市と農村との本質的差異の止揚」の問題をめぐって、

エンゲルス「反デューリング論」

レーニン「カール・マルクス」

「資本主義は工業と農業との連絡を決定的に切り離す。

しかし同時に、その発展の頂上において、その連絡の恢復のための、科学の意識的応用と集団労働の組合せとを

基礎とする工業と農業との結合のための、人類の新しい定住の仕方（農村の荒廃・野蛮化ならびに、大都市における膨大な大衆の不自然な密集、の廃棄を伴う）のための、新しい諸要素を準備する」。

○それが独占の蓄積基盤の崩壊、低賃金労働力の供給基盤の崩壊として、どれ丈の意味をもつてゐるのかが確定されなければならない。

○農業の外国依存—國際分業論の破綻